



学校法人
鎌倉女子大学

いざ、もう一度

－中等部・高等部卒業式式辞より 平成23年3月13日（日）－

今も揺れを感じたところですが、こんなに綺麗な春の陽の下で、大変な悲劇がくりひろげられています。春の陽の恵みも自然の力なら、大津波の脅威もまた自然の力です。世界ネットのアメリカのCNNテレビが、このような災害の中で暴動も略奪も起こらない、日本人の道徳性・倫理性の高さを感嘆の眼差しで伝えています。

東日本を襲った観測史上最大の巨大地震、東北地域と比べて、この辺りは、被害は最小限におさまったようですが、それでも、この席に集っている方々の中にも、場合によるとご本人、あるいはご親戚、友人・知人、いろいろさまざまな形で罹災した方々も、少なからずいらしたのではないかと思います。お見舞い申し上げます。事実、大学生の中には、教職員の家族の中には、直接的な被害にあった状況が刻々伝えられています。

特に発生直後の11日の夕方には、約280名の生徒の皆さんが学校に止めおかれ、初等部生は約120名、学期末が幸いして大学生は約50名、中には不安な一夜を明かした人たちも相当数おられたわけです。ご父母の皆さまも、大変ご心配になったことと思います。また、帰宅方法等、速やかにご対応頂きまして有難うございました。

でも、君たちが、無論初めはびっくりしたようですが、しかし大変落ちついていて、泣きごと一つ言わず、小さなおにぎり一つにも喜んでくれ、先生方・事務の人たちと一緒に、次第には時に笑い声もあげながら一夜を過ごしてくれたことを聞きまして、私は、感謝と共に、とても感心をさせられたところでもありました。

この卒業式も、本当ならば、昨日開かれる予定でしたが、中・高等部の先生方も、大事をとって一日間をあけてくれたようです。ご父母の皆さまにもご理解を頂き、重ねてお礼申し上げます。

古くは、今から約90年近く前に起こった関東大震災、大正12年9月1日、平成7年1月17日の阪神・淡路大地震より16年、日本は、地震国と言われているわけですが、その事実をまざまざと目の当たりにさせられたわけです。私自身の人生を通じて、このような体験は、これまでにありません。

生きていく限り、人生や世界にはいろいろさまざまなことが待ち受けているわけですが、しかしはっきりしていることは、それにも拘わらず、私たちは、元気を出し、勇気を出して、生きていかなければなりません。

ちょうど1900年、20世紀を目前に死んだ天才思想家にフリードリヒ・ニーチェという人がおりますが、彼は、『ツァラトゥストラは、こう言った』という、いささか奇妙なタイトルのついた本の中で、こう書き遺^{のこ}しています。

「これが生きることであったのか、死を前にしてこそ、こう言おう、それならば、いざ、もう一度」。私は、この言葉を聞くと、どこからか勇気が湧いてくるような気持ちになります。「これが生きることであったのか、死を前にしてこそ、こう言おう、それならば、いざ、もう一度」。ニーチェは、人生最大の絶望といってもいい、何もかも失ってしまう死を前にしてさえも、なお、こういおうじゃないか、といているのであります。「それならば、いざ、もう一度」と。いざ、もう一度、立ち上がり、生き、人生を雄々しく始めようじゃないかと。

若い君たちには、この言葉はやや疎遠かも知れませんが、しかし誰の青春にも迷いもあれば、悩みや不安もつきものです。そして、長い一生です。どうぞ、さまざまな物事にぶつかっても、いざ、もう一度、立ち上がり、勇気を出して、生きて行って下さい。そして、日本人は、日本は、こうした悲劇にへこたれず、再び立ち上がっていかねければなりません。

これを私のメッセージとし、この機に、若い皆さんに伝えさせて頂きたいと思います。今日は、いろいろな思いを胸に卒業式を迎えましょう。

[>前のページへ戻る](#)